

「流通とSC・私の視点」(516)で「植林と志とノーベル賞」というテーマで、ケニアのワンガリ・マータイさんのことを書かせていただきました。ワンガリ・マータイさんは植林という地球環境を改善することを“手段”として、人々の気持ちを和らげ、平和の尊さを訴え、戦争を2回終結させることに成功しました。すなわち、植林という手段を通じて、戦争(内乱)を終わらせるという偉大な成果により、ノーベル平和賞を受賞したのです。

今年のノーベル平和賞の受賞者は、バングラデシュのグラミン銀行と創設者ムハマド・ユヌス氏です。グラミン銀行は貧困層相手の少額無担保融資専門銀行であり、現在、借り手320万人、融資総額421億ドル、返済率は98%と超高い結果となっています。

グラミン銀行の創設者であるムハマド・ユヌス氏は、1972年バングラデシュ独立後、留学先のアメリカから帰国し、バングラデシュ政府経済局副委員長の後、チッタゴン大学経済学部長に就任しました。ムハマド・ユヌス氏は理想に燃え、夢をいっぱい抱いてアメリカから帰った後、大学近くのジョブラ村の貧しい家庭を訪ね歩き、そこで、ソフィアという3人の子持ちの若い女性に出会いました。ソフィアは竹椅子を作ってその日の糧を得ていました。ソフィアは高利貸しから20円弱の金を借りて商人から材料を買い、借金を返すためにその日のうちに竹椅子を作り、高利貸しに売り、一日働いても2.5円の利益にしかなりませんでした。高利貸しから借りた者は、ほんのわずかな借金をしただけで、また再び借金をしなければなりません。彼らは悪循環に陥り、ますます貧しくなっていき、死ぬまで高利貸しの奴隷になってしまっていました。

ムハマド・ユヌス氏は、単に貧困者に対して、日常生活を助けるという「施しをしてやろう」とか「ボランティア」の発想で庶民銀行を設立したのではなく、もっと根本的に「貧困者の自立を助ける・貧困から抜け出す手法を提供する」という人間の尊厳に基づいた考え方をもち銀行を設立しました。その結果、借り手の46%が貧困層から脱却したと言われています。

ノーベル賞を受賞するためには、「偉大なる成果」が必要になります(博士号の取得は誰も解明されていない独自性であり、成果とは関係ありません)。ムハマド・ユヌス氏が、単に貧困層にお金を貸して、彼らの生活を助けたということが成果ならば、お金持ちの施しやボランティア活動と同じであり、素晴らしいことであり、賞賛すべきことではありますが、偉大なる成果とはなりません。

丁度、ワンガリ・マータイさんが、植林をして地球環境を改善しようとした行動と同じレベルであり、単に植林をしただけでは偉大な結果にはなりません。ワンガリ・マータイさんは、植林をしたことが偉大なる成果ではなく、植林をすることにより人々の心を動かし、人々に争いごとが馬鹿らしいという感情が生まれ、内乱(戦争)を終わらせたことです。植林をしたことは手段であって、成果ではなかったのです。

ムハマド・ユヌス氏の成果も、貧困層の生活を金銭面で支えたのが成果ではなく、貧困からの脱却と自立を成功させたことです。両者の共通点は、見た目は「植林」とか「貧困者への金貸し」であり、これ自体も世の中に貢献する正しい行為ですが、それだけではノーベル賞を受賞するような偉大なる成果にはなりません。ワンガリ・マータイさんの偉大な成果は「植林を通じて戦争を終わらせたこと」であり、ムハマド・ユヌス氏の偉大なる成果は「貧困層にお金を貸すことにより貧困から脱却させ、自立させたこと」です。すなわち、植林とお金を貸すという行動が「世の中を動かす」あるいは「世の中を変える」という高い“志”によって、世の中に貢献したことです。

我々の流通やSC業界の中で、植林や貧困者への金貸しという善意かつ努力行為はしているが、戦争を終わらせるとか、貧困から脱却させ自立させたことと言った偉大なる成果になっていない努力行為がたくさんあります。ガンバリましょう!!

(株)ダイナミックマーケティング社³
代 表 六 車 秀 之